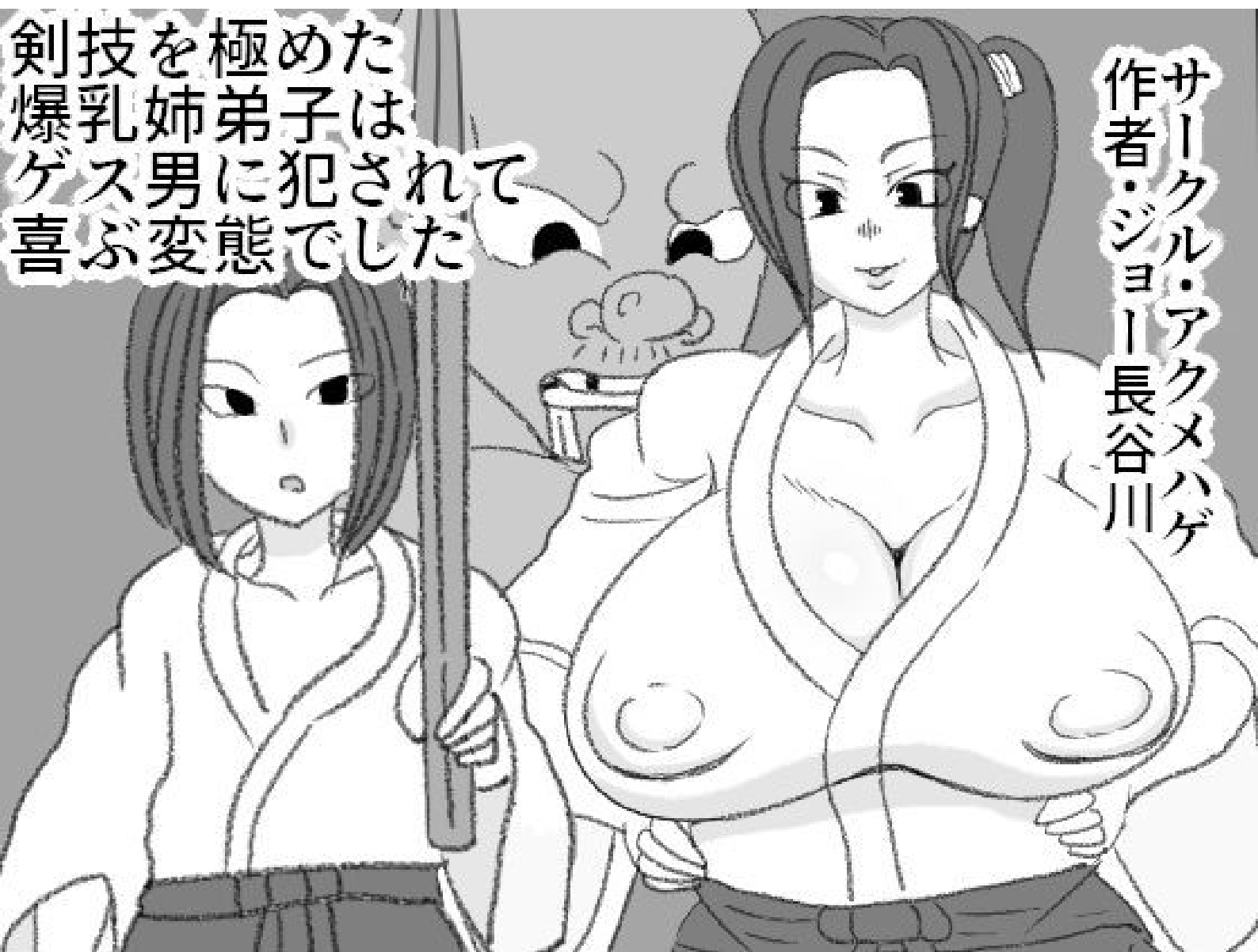


サークル・アクメハゲ
作者・ジヨール長谷川

たは犯された
め弟子に態
極姉男変
を乳スぶ
技爆ゲ喜
剣



「ミキ姉、今日こそは
一本取ってみせるよ」



僕は寺田拓斗
無元一刀流の次期当主だ

一三十分後

(糞っ……!)

(駄目だ……)



(全く歯が立たないっ!!)

「どうしたタク坊、
もう終わりか？」

「言うようになったなあ」
「タク坊」

「どれだけ成長したのか
見せてもらおうか」



「女一人にも
勝てないのか？」

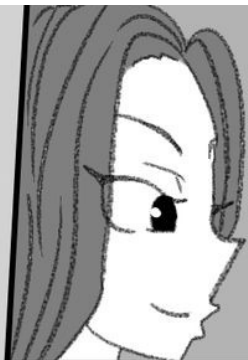
「その調子じゃ」

「いつまで経っても
一人前にはなれんな」



道内で神童と
呼ばれている僕だが
ミキ姉には全くもって
歯が立たない

「で、まだするか？」



高島美紀
通称ミキ姉
とても強い僕の姉弟子

僕の父であり師匠でもある
源一斎と同じくらい強い

父は跡継ぎである息子の僕が
女性であるミキ姉に勝てない事を
快く思っていない

追い出そうにも実力は確かであるため
父にとつては目の上のごぶの様な存在らしい

その上ミキ姉見たさで
うちの道場に入門した
門下生も多い

感謝こそすれど
憎む理由など
まるでないのだ



そんなミキ姉
目的にも
厄介な奴はいる
品の無い
権八という男だ

ザッ…

この権八という輩は
ミキ姉に敬意も無く

いたずらに道場に来る下種で
どうしようもない屑野郎だ

「オレが勝ったら
その場ですぐに
処女膜ぶち
破ってやるぜえ？」

「覚悟するんだなあ！」

「おう
お前が勝ったら
処女を奪うなり
殺すなり」

「この体をお前の
好きにしろ」

「ひゃっはあ！」

「おめこ頂きい！」

勿論遊び半分
で道場に来てる奴なので

完膚無きまでに
滅多打ちにされる

「おいチビ！」

「次舐めた態度
取ったら承知しねえぞ！」

この男は僕にすら
勝てる見込みも
無いのに口だけは
一丁前だ

そんな事を言いつつも
僕もそんな輩と変わらない

いつの間にかミキ姉を
好きになってしまっ
ているのだから

肝心のミキ姉は
僕の事を男としては
見ていないらしい

昔一度だけ
ミキ姉に尋ねた事がある

「ミキ姉はさ……
将来結婚したい相手と
かっているの？」

「剣の事はすっかり
考えてるからなあ……」

「恋愛感情
とかがつていうのも
よーわからんし」

「うーむ……」

「戦いたい奴
ならいるけど
結婚相手は
考えてなかったなあ」

「このまま婆さんにな
るまで剣の道を進む
つていうのもなあ」

「つてなるとお……」

「解決策としてはあ……」

「まっ！いい歳なつても
嫁の貰い手がなかったら」

「タク坊が代わりに
貰ってくれよなっ！」

「……うん」

この時にすぐにでも
告白していれば
良かったのかもしれない



「ぐへへ…」

「やっと恨みを晴らせるぜ」

「糞アマあ」

「修行の成果に感謝だな」

「辱めてやるぜ」

「なんということだっ」

「嘘だ……」

「有り得ない……」

「あの美紀がチンピラにっ!？」

「はは……」

「凄いつ!」

「凄いぞ権八!」

「これが敗北かっ!」

「ミキ姉は一切悔がる様子も見せず寧ろ初めて負けた事に興奮している様子だった」

「お前いつからそんなに強くなったんだ?」

「黙って」

「脱げ」

「門下生の前で」

「犯してやるよ」



「色香に惑わされおつて」

「我が息子
ながら情けない」

「見ろ、あの女を
初めての凌辱に
期待の顔をしているぞ」

「とんだ淫乱娘だな」

嘘だ……
ミキ姉が
そんな……

「にしても
でけえ乳だな」

「ぐへへ……」

（げへへ）

（源二師匠も
悪い人だぜ）

「乳のデカさは
他の女に負けないよ」

「まっ、剣の腕以外の
唯一の自慢だな」

（息子の前で
ミキを犯して
やれなんてよお）

「そんじゃあ」

「早速この生意気なデカ乳を……」



「フウーツ」

「フウー…」

「オレあ普通のセックス
じゃ勃たねえからよオ」

「ちよいと乱暴に
させて貰うぜ」

もみっ

ぶるんっ



「んごっ!」

ぶるんっ

バチインッ

「オラアツ!!」



(アイツっ!)

(ミキ姉に
乱暴なっ!)

「おいミキィ！」

「今にオレのチンポ無し
じゃ生きていけねー
体にしてやるからなあ」

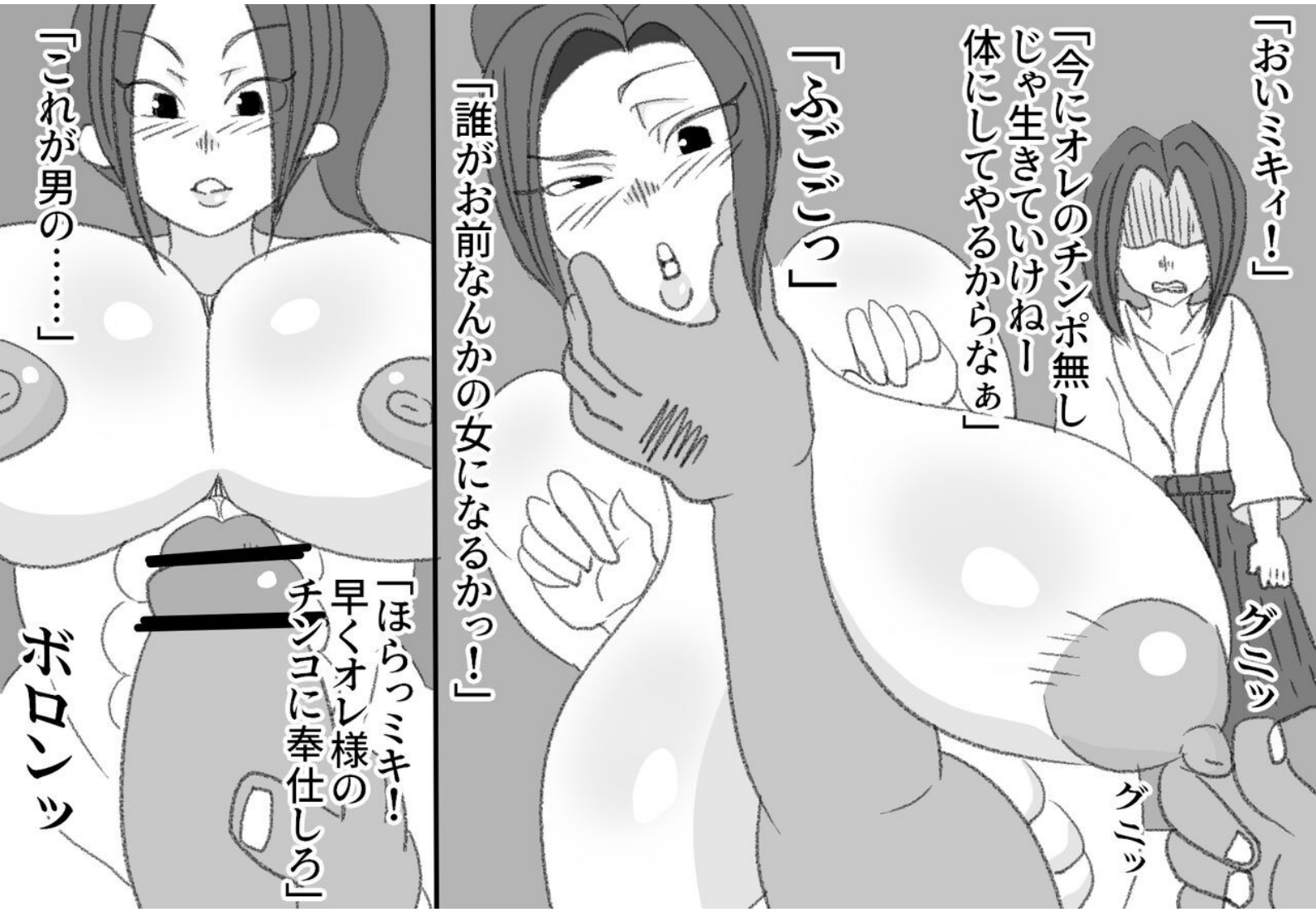
「ぶいぶい」

「誰がお前なんかの女になるかっ！」

「ほらっミキィ！
早くオレ様の
チンポに奉仕しろ」

「これが男の……」

ボロいッ





「ダメだな」

ドンッ

「いいかお前ら」

「雌の扱い方
ってもんをよく見とけよ」



「ぶっころうか？」

「初めてだから」

「よく知らないけど…」

「ミキ姉は優しく権八のモノを手で包みながら おずおずと亀頭を舐め始めた」

みひみひ...

「おっ?!」

「そのでけえ乳で奉仕すんだよ! バカ!」

権八は馬乗りのまま
ミキ姉の乳首を両手でつまみ
竿を谷間にすべりこませ

力任せにミキ姉の頭を
押さえこんだ

ぐちゅん

「もがっ!」

「オラオラ!
しっかり
啜えやがれ!」

がっぽ

(こんな男に
私がいい様に
されるなんてっ！)

ぎゅっぽ

ぶっちゅ

ぐっぽ

(今まで負けた事
なんかなかったのにっ！)

(負ける事が……)

(こんなにつ……)

こんなにつ……)

「んうっー！！」

ぎゅっぽ
ぎゅっぽ



「あっ…♥」

「んっ♥」

「んん？おいおいっ」

「嘘だろお前、
もしかして今ので」

ぐちゅ

ぐちゅ…

「濡れちまった
のかあ?!」



「だらしねえ顔じゃねえか？」

「ええ？」



権八はこれ
僕に対して
これ見よがしに

ミキ姉の口にある
精液を見せつけてきた



（こんなにも刺激的
だったなんてっ！）

だらぐっ

「ぐひっ!」

「濡れ濡れだぜえ」

ぴちや...

ミキ姉は権八に
されるがままに
喘ぎ声を漏らしていた

ミキ姉の喘ぎ声と
権八の舐める音が
静かに道場に響いた

権八は両手でミキ姉の
大きな尻を両手で抱え
いやらしく音を立てながら
アソコをしゃぶりだした

「おっ♡」

ぴちよ...

「んひっ♡」

くちゅ...

「フウツ...♡」

「ハア...♡」

「まな板の上の鯉とは
この事だな!ガハハ!」

「ごめい...」

「ぐひひひっ！」

「宣言通りマンコに
オレ様のモンを
ぶっ挿してやるぜ！」

「処女膜にお別れを
言うんだな！」

「グツツ……!!」

「こんな事なら
早く気持ちいを
伝えていけば……!!」

「ご、権八！」

「ちよっと待ってくれ！」

「タク坊っ」

「手を」

「握ってて
くれないか？」



(本当に入るのか…?)

(大きい……)

「ぐふっ」

「突っ込むぜ」



「ミキ姉がそれで安心するなら」

「……うん」

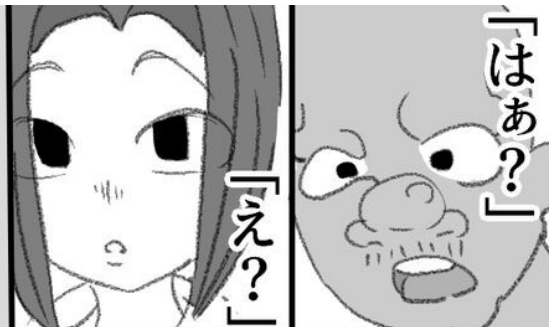
「喜んで」



(そうだ、ミキ姉が僕を男と見ていなくても)

(僕はずっとミキ姉の事を思い続けよう)

ギョッ……



「え?」

「はあ?」



「いざとなると緊張してな」

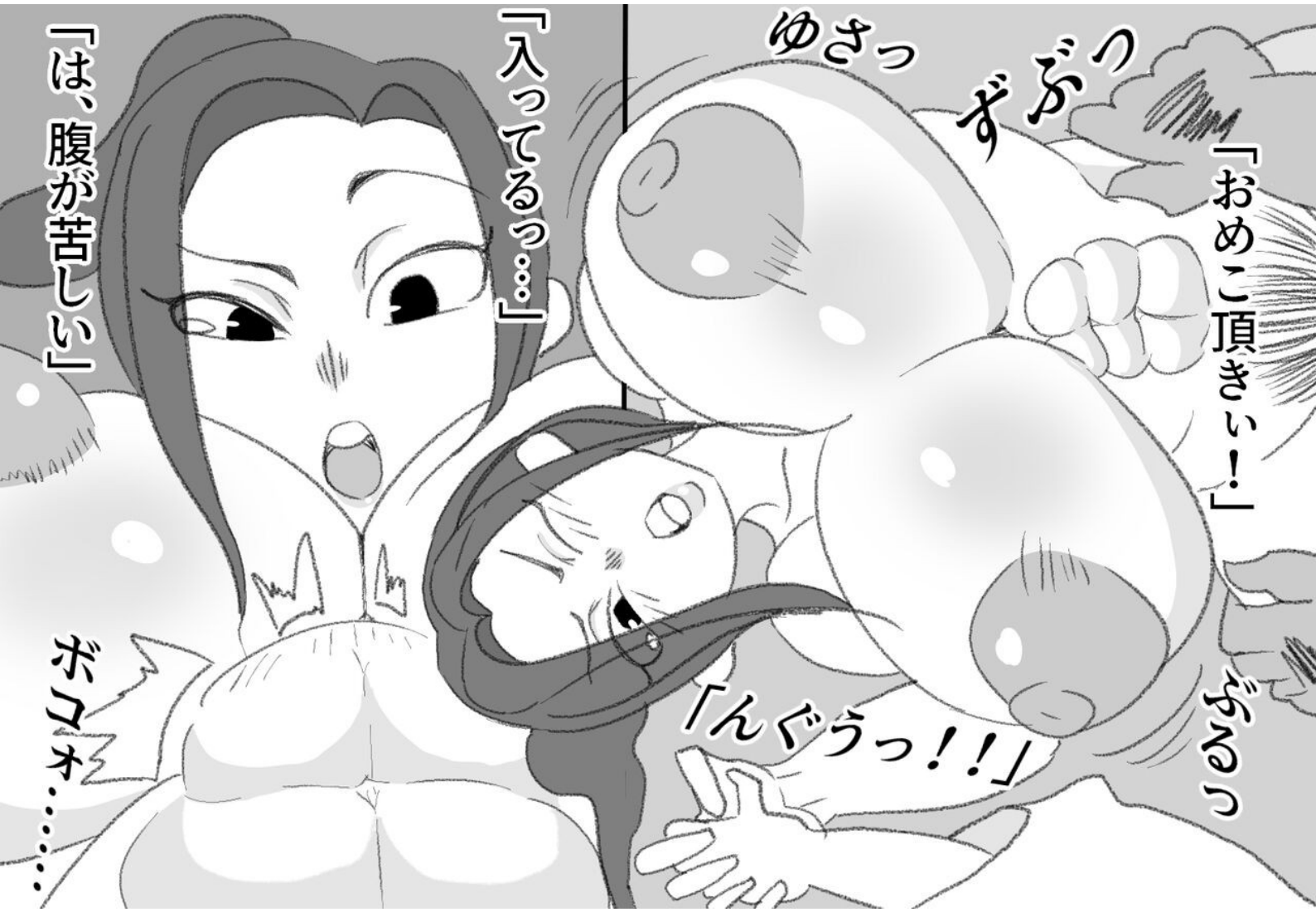
「だから握っててくれ」



(ぶふっ、バカだぜ このアマ!)

(鈍感女は恐ろしいな)

(自ら寝取られ 特等席にご案内かよっ)



「は、腹が苦しい」

「入ってるっ……」

ゆさっ
ずぶつ

「おめこ頂き……」

ボムボム……

「んぐうっ!!」

んぐ

「ぐへっ
処女マンコの
締りは最高だなあ」

「ぶら…」

「ああ、タク坊が
手握っててくれたから
痛くないぞ」

「ミキ姉！
大丈夫?!」

ミキ姉の股から
赤い血がどろどろと
権八の竿を伝っていた





「痛いっ♥」

「タク坊お！」

「ひいんっ♥」

べちいんっ

「ミキ姉！」

しっかりして！」



「きゅっ
急に動くなあ！」

「うぎゃっ！」

ぼるんっ

ぼるんっ

ドチユツ

「イチヤついでんじゃねえ！」



「さっきのイラマチオで
分かってんだよ」

「痛いっ♡」

痛がっているミキ姉は
痛いと言いながらも
どこか気持ちよさそうだった

「かぶっ♡」

「そらっ!-」

ほむっ

つまゆっ♡

「おラッ!」

どどっ

「テメーが痛めつけられて
喜ぶ変態だって事をよ」

「おきりり♡」

「初めての敗北に
初めてのセックス！」

「オメーにはご褒美
でしかないようだな！」

ぎゅっ

「コイツ首を
絞められて
感じてるぜ！」

「見てみろよ
クソガキ！」

「か…はっ…♡」

「ああ…♡♡」

悔しいが権八に
言われた通りだった

ミキ姉は首を
絞められて感じていた

「あ……おっ……♡」

グググッ……

権八の指がメリメリと
首に沈み込む事に
顔が真っ赤に紅潮していく

「あ……♡」

ピキ

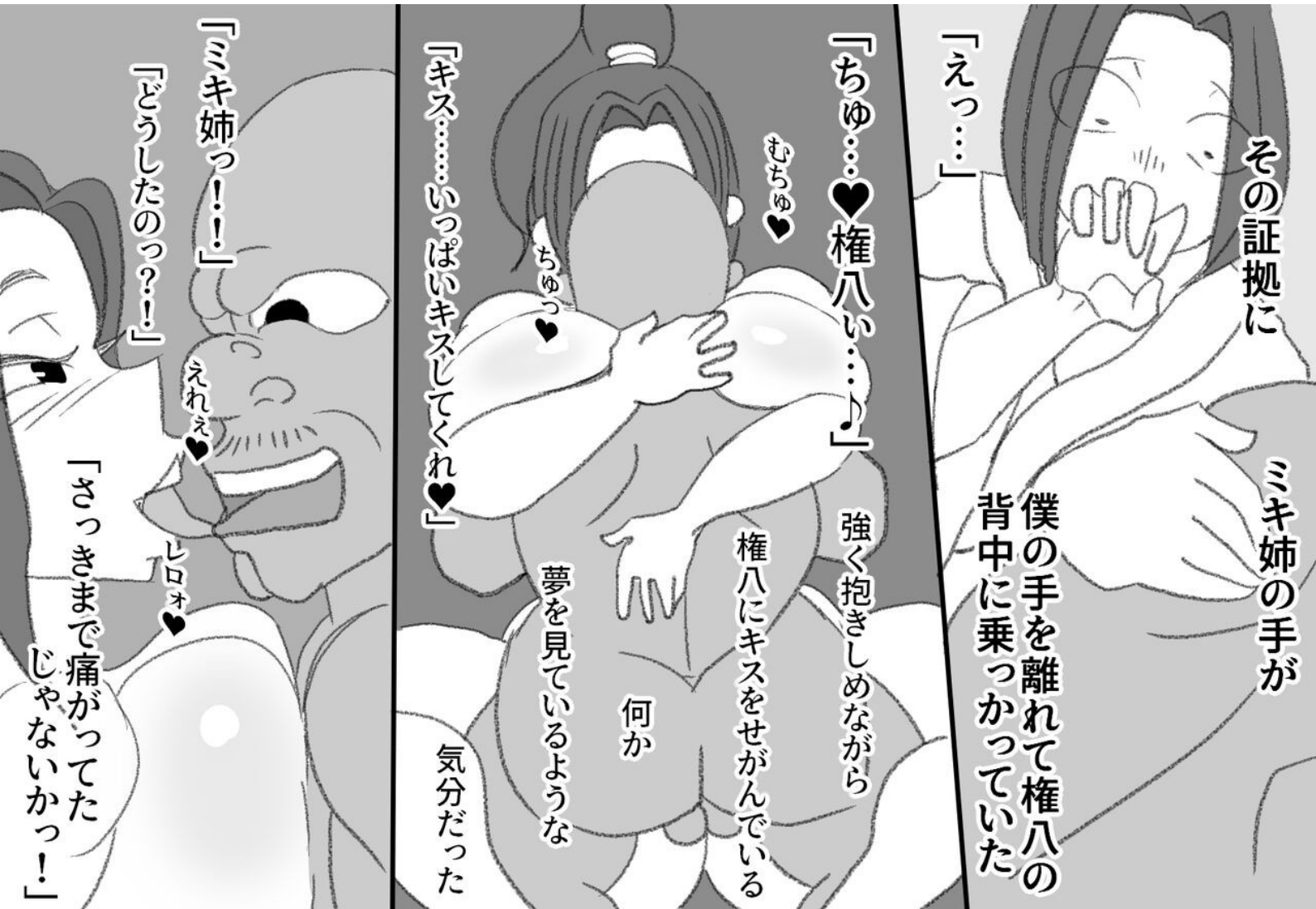
ピキ

涙も出て
こめかみにも
青筋が走っている

それでも

それでもミキ姉は
嬉しそうだった

ブクブクッ



その証拠に

ミキ姉の手が

僕の手を離れて権八の
背中に乗っかっていた

「えっ…」

「ちゅ…♡権八い…♪」

むちゅ♡

強く抱きしめながら

権八にキスをせがんでいる

何か

夢を見ているような

「キス…いっぱいキスしてくれ♡」

気分だった

「ミキ姉っ!!」

「どうしたのっ?!」

えれえ♡

しほぉ♡

「とっきまで痛がってた

じゃないかっ!」



「タク坊……」

「前に恋愛感情が
わからないって言ったろ？」

ドチユツ♡

「今になってわかったんだ」

「権八に」

「殴られて」

「首を絞められて」

グチユ♡

「犯されて」

ヌチユ♡

「凄い胸が
キュンとするんだ！」

ズチユツ♡

「私権八を好きなんだ！」

「きつとこれが恋だ！」

「愛だ！！」

ちがうよミキ姉……
それは好きって
感情じゃないよ
ミキ姉……

やめてよ

お願いだよ

そんな顔しないでよ

どちゅつ♡

「なあ権八♡」

「権八は私の事好きか？」

ずっちゅ♡

ぬっぶ♡

「おうよっ！大好きだぜ！」

(都合の良い肉便器としてな！)

「よく見とけクツガキ！」

ぱんっ♡

「このマシコにオレの精子が大量に流れる様をよっ！」

ぱんっ♡

「ああっ♡」

「出してくれ権八！」

「お前の子を産みたい!!」

ぱんっ♡

だら〜♡

やめろお……

見せるなあ……

♡じい♡



「ああ…♡」

「甲で…♡…♡…♡…♡…♡」



ドゥドゥ…♡…♡…♡…♡…♡

「んおっ♡♡♡」



権八は亀頭に付いた残り汁を
ミキ姉の下腹部に塗りたくり

ミキ姉は権八に
キスをしようと
している

僕はミキ姉の手を
握ろうと思ったが

必要とされて
いない事を
思い出し

自分の手を

そっと

冷たい床の上に置いたのだった